

●シューマンの作品にチャレンジ●

# レッスンの友

ピアノ音楽誌 a magazine for music lovers

# 6

2010 / June  
No.561



シューマンの作品にチャレンジ

「幻想小曲集」

「謝肉祭」

武田美和子・杉谷昭子

小林五月

## 好評連載

- ショパンの実像 ..... 北村智恵  
シューマン夫妻 愛の軌跡 ..... 川嶋ひろ子  
名匠探訪 ..... 上田弘子  
誰でも分かる 楽しい音楽史  
「フレデリック・ショパン」〈1〉 ..... 芹澤尚子

## Interview

河合 優子

ダヴィッド・カンピニョン

渡辺 健二



Photo: ROSELINE SIROUY

ピアニスト

## ダヴィッド・カンピニョンさん

すべて条件が揃うのを待たないで  
自発的に求める方向に  
向かうことも必要ですね。

四十年以上も日本で暮らしたという、フランスとベルギーの血を持つ父親と、日本人の母親との間に生まれたカンピニョンさんは、葉山で生まれ育ったという湘南ボーイ！ 勿論日本語は堪能で、甘いマスクと穏やかな語り口調からは、ご両親から受け継いだであろう品の良さ、育ちの良さが感じられる好青年である。この七月三日(土)に東京文化会館小ホールでリサイタルを行なう。

ピアノ、乗馬、水泳、スキーと  
多くのことを身に付けました

「私は、神奈川県葉山で生まれ育ったのですが、芸術的な家庭環境に恵まれていました。母は画家で、父はコピーライターや映画の宣伝関係、映画の字幕の翻訳などの仕事に携わっていたのです。子どもの頃から、民族音楽、クラシック音楽、オペラ、バレエなどに興味を持っており、最初はヴァイオリンから始め、次にピアノ、乗馬、水泳、スキーと、いろんなことを身に付けました(笑)が、その後小学校の時からピアノのレッスンを本格的に始めました。」

「最初はヴァイオリンというのですが、ご自身から？」

「幼稚園の時でしたから……ピアノの方が、自分の意志で始めたのかも知れません。今申し上げたようにいろんなものを習っていましたが(父からフランス語、英語も)、小学校の卒業アルバムには、自分のなりたいたいものとして『ピアニスト』！と書きました。と言うのも父の影響で、サントリーホールなどでの有名なピアニストの演奏会に、週に一回は行っていましたので、ピアニストになることは素晴らしい、と思ったのですね。」

僕は好きでやっていることには、何でも集中して、最後まで徹底的にやるタイプなんです。例えば、神奈川県少年少女馬場馬術大会で二位になったことがあり、オリンピック選手だった野沢温泉の村長さんは、僕を合宿に参加させて、馬術のオリンピック選手にしようと考えていたらしい(笑)。やはり運動神経は良かったんですね。」

——さて、ピアノですが？

「葉山や鎌倉の先生についてバイエル、トンプソン、バルトーク『子供のために』などの曲集から



Photo: ROSELINE SIROUY

始めたのですが、十歳の時かな、一人で夏の講習を受けにイタリアとベルギーに行ったのです。」

「エエッ、一人で？」

「ええ。スカンジナビア経由の飛行機でしたが、行き先を書いたブレートを首からぶら下げて(笑)。父の友人が空港まで迎えに来てくれましたので、大丈夫でしたが。」

講習の後、父方の祖母の友人で、ローマのサンタ・チェチーリア音楽大学教授でアルフレッド・コルトーの直弟子のアンナ・ローサ・タデイというピアニストを訪ねて行ったのです。(この方はたまに日

本に来て、京都などで公開レッスンを行なっています)。二週間ほど滞在して、バルトック、モーツァルトのK310、シューベルトの即興曲などを聴いていただきました。それで、(私に)見込みがあると思ってくださり、彼女のベルギーの友人を通じて、安川加壽子先生を紹介していただいで、東京でお目にかかったのです。

安川先生は、私のピアノを聴いて『歌う能力と音の色合いが豊かだ』と評してくださり、それで、いづれフランスの音楽院で勉強する、という方向に進むことになっ

たのです。

中学は東京のフランス人学校に通っていましたが、葉山からですと往復四時間もかかるんです。朝六時に自宅を出て、家に帰ってくるのが夜の八時ではピアノがでなくなるので、三ヶ月くらいで退学し、フランスの文部省が行なっている通信教育を受けました。週に十五時間ほど自宅に家庭教師に来ていただいたり、海を眺めながら語学を勉強したり、ピアノを練習したりして過ごしました。ピアノのレッスンは、東京まで通っていませんでした。

で、当時日本に滞在しておられたアンリエット・ピュイグロジェ先生(註・東京芸術大学客員教授として多くのピアニストを育て、多大な影響を与えた)の『若い人は一人で勉強するよりも、音楽学校に入って、自分より上手い人、劣っている人などの中で様々な経験を積んだ方が、より早く実力を身に付けることができる』というアドヴァイスによって、十五歳の時に、また一人でリヨンのコンセルヴァトワールに留学することにしたのです。そこで一年勉強して

から、パリの郊外にあるサン・モール音楽院を経て、パリ国立高等音楽院に入学して、大学及び大学院を修了。ここまでが、言わば僕の第一ピリオドという訳です。」

**一所懸命練習しているけれど僕より下手な人も居て(笑)**

「すると、フランスに行きつばなし？」

「いえ、両親は葉山に居りましたから、初めのうちは年に二回、父が他界するまでの十年間くらいは、年三〜四回は小さなコンサートなど音楽活動のために帰っていました。父が二〇〇六年に他界してからは、年に一回くらいになりました。」

今回は七月三日に東京文化会館でリサイタルがありますので、その前に帰る予定です。」

「一人でヨーロッパに行かれた訳ですが、不安はなかった？」

「どうでしょう……確かに行動を起こすのが早過ぎたかも知れませんが、あのクラウディオ・アラウ(註・チリ生まれの大ピアニスト。一九〇三〜九一。南北アメリカ

カ、東西ヨーロッパ、アジアなど世界的に活躍。最晩年までコンサート・録音を精力に行ない、巨匠の名にふさわしい活躍をみせた。)が『ものごとを早計かと思われほど求める時こそ、良い結果に繋がることがある』と言っていきますが、すべて条件が揃うのを待たないで、自発的に求める方向に向かうことも必要ですね。』

『上手い人や下手な人たちからの刺激』は受けたのですか？

「そうですね。特にリヨンでは、本当に全然練習していないにも拘わらず僕よりずっと上手い人がいれば、一所懸命練習しているけれど僕より下手な人も居て(笑)：：集中力の差でしょうか。この集中力も、音楽家にとって非常に大切なものですね。これは生まれつきのものでありませんから、限られた時間を効率的に使う工夫、努力は必要です。」

リヨンでのホームステイ先は音楽家の家族で、プールもテニスコートもあって環境も良かったのですが、一年間しか居ませんでした。パリ郊外にあるサン・モール国立

音楽院で教授をなさっていらしたカトリヌ・コラル(註・一九四七〜九三、フランスの名ピアニスト)先生が、『是非私のクラスにいらっしゃい』とおっしゃってくださったので、そこに移りました。このクラスに一位で入り、そこでゴールド・メダルを三個取って(ピアノ、室内楽、初見)一九八九年に卒業しました。これが僕がヨーロッパで最初に取ったディプロマですね。

この頃は、コラル先生は独身でいらしたので、大きな邸宅を借りて、僕ら門下生を含めた五人で家賃を分担して暮らしたんです。庭が一四〇〇平方メートル(！)もあって、僕の部屋の前には桜の木があった。音楽家たち五人ですから、近所との音によるトラブルも無いし、アパートを個人で借りるよりも安上がりで良かったですよ。

その後、申し上げましたように、一九九一年にパリ国立高等音楽院に入学し、九五年に審査院全員一致で卒業し、さらに大学院で学んで九九年に修了しました。

その年、さらに再びアンナ・ロ

ーサ・タデイ先生の紹介で、ローマのサンタ・チェチーリア音楽大学の大学院で、セルジオ・ペルティカローリ先生に師事しました。そこではピアノ科、室内楽科で計五年間学んで二〇〇四年に修了。以降、リサイタルなどを開いて、大きなレパートリーを充電する貴重な時期となったと思います。

一口にレパートリーと言っても、永久に吸収できるものではなく、その場で覚えて理解して弾くものと、より深く自分のメモリーに入ったものを引っぱり出して弾く、という要素も必要なこともありま。二十歳代で覚えたものと、五

十歳代で覚える曲とは、違うところもあるんですね。いずれにせよ、その期間に吸収したものは、非常に大切であることは言うまでもありません。

例えば、昨年十二月十八日に行なった、神奈川県逗子市の文化プラザという新しいホールでのリサイタルでは、十年前に勉強していたクレメンティのソナタとか、『見捨てられた悲劇のジドーデ』や、シヨパンの幻想曲などを再び勉強して、再発見し、深めて、というようなことをやって発表しました。曲と言うものはワインのようなもので、ボージョレー・ヌーヴォ



Photo : ROSELINE SIROUY

「それはそのまま飲めますが、それは軽いワインで、やはり良いものは五年、十年寝かせておくと、それだけ熟成していきます。それも音楽の面白いところですね。」

勉強し、吸収し、また勉強し直し、忘れて（置いておくと言うことです）、その間に他のレパートリーを身に付け、また異なる音色、そして感動などに触れて、再発見しながら勉強していくのが良いと思います。」

### 音楽の表現は 役者のセリフのようなもの

「話を戻しますが、パリ音楽院時代はどんな勉強を？」

「言わば基礎的な勉強をしており、レパートリーという面ではあまり拡がらなかったかも知れませんが。」

ジャン＝マリイ・コテという先生に師事しましたが、非常に良い先生で、テクストに対して忠実な姿勢の方で、楽譜の中に深く入り込んで行って理解をさせる勉強方法を教える方でした。」

「イタリヤでつかれたペルティ

カローリ先生には？」

「音楽への理解力、表現力ですね。そしてその学生自身の中に持っている能力を発揮させる。そして大きなレパートリーをこなせるようにする。こういう指導を受けました。」

この時代に、ブラームスのソナタとかベートーヴェンの『ハンマークラヴィア』、ストラヴィンスキの『ペトルーシユカからの三章』、バルトークのコンチェルト第一番など、本当に若い時でないといふ吸収できない、それまでは全くやっていなかった次元、領域の曲に夢中になっていました。」

それから、その時代で僕にとって大切なことは、一九九七年、二〇〇〇年頃、日本に戻っていた夏の時期に藤井一興先生にも見ていただいたことですね。当時フランスに戻っておられたビュイグロジェ先生の紹介でしたが、非常に良いレッスンを受けることができました。デュティユーのソナタやバッハの『ゴルトベルク変奏曲』など、大体僕のリサイタルで弾く曲を見ていただきました。また、まだ若かったので（二十歳頃だっ

たかな）ヨーロッパでのコンクールの準備のため、ということもありました。」

藤井先生は非常にお忙しくて、今飛行機で戻って来たところだ、とか、新幹線で戻ったところだ、とか、演奏旅行の合間の貴重な時間を割いていただきました。」

藤井先生は、非常に音楽表現が豊かな方だと思います。ペルティカローリ先生もそうですが、技術的な難しさを、音楽の理解や音色のニュアンスの表わし方によって忘れさせる（意識させないようにすること）ができるのですね。つまり『難しい！』と思いつつ、その難関を乗り越えることができなくなることもある。でもその難しさは実は幻覚で、見方を変えてみたら、それまでできなかったこと

ができてしまう、ということもあります。」

音楽の表現というのは役者のセリフのようなもので、台本をただ読んだだけでは面白くも何ともないものが、舞台で役者が感情を入れて、例えばロミオが自分の愛を



Photo : ROSELINE SIROUY

訴えているとなると、観衆はそれを信じて、そのフレーズの意味がやっと生きてくるんですね。音楽もそれと同じで、フレーズに生命を与えることによって、技術を乗り越える、そういうレッスンではない。それが、演奏家の本質なのではないかと。

## イタリアの楽派には、 ロシアの影響が大きい

——本格的なコンサートにスタートさせたのは？

「大きなコンサートとしては、



Photo: ROSELINE SIROUY

二〇〇四年の葉山の福祉文化会館でのものですね。六百人ほど入るホールで、良い状態のスタインウェイが備えられています。このコンサートの評価が、プレスなどで取り上げられたのです。それから、先ほどお話しした逗子の文化プラザで、二〇〇五年のオープンの際にリサイタルをしています。翌年には、このホールで若手のプロの《アルス・オーケストラ》とモーツアルトのK488のコンチェルトを共演しています。このオーケストラは《サイトウキネン》のように、コンサートのために集まって演奏するオーケストラです。

それと、フランスのオタン市主催によるローラン美術館で企画していたリサイタルや、神奈川県のカスヤの森現代美術館、長野県の音楽学校で企画していたリサイタルもありました。

七月三日のリサイタルでは、バツハルプゾーニのコーラル、スカルラッティのソナタ、ベートーヴェンのソナタ、ショパンの『舟歌』とバラード第四番、それにシューマンの『謝肉祭』を弾きます。

これまで、僕はロシアものが多

かったのです。何でフランスとイタリアで勉強したピアノリストがロシアものを？と言われますが、一九八〇年から九〇年代にかけて、ラザール・ベルマンなどイタリアに亡命したロシア人の音楽家が多かったのです。それでイタリアのスクール（楽派）には、ロシアの影響が大きいのです。」

「——では、あなたご自身の得意とするものは？」

「と言うよりは、聴き手の皆さんが好んでくださったものを挙げた方が良いかも知れませんね。なぜなら、自分のやっていることを理解していただいたというよりは、とりもなおさず、自分のメッセージが通ったということですね。その意味では、もしかしたら先ほど申しましたストラヴィンスキーのバレエ音楽によるものとか、ムソルグスキーの『展覧会の絵』、プロコフィエフの作品、フランスものではドビュッシー、後はロマン派の、それも大曲の方が集中力を持って弾くことができたように思います。」

でも、フランスのアヴァンギャルドとロシアの二十世紀の作品と

### ダヴィッド・カンピニョン David Campignon

1972年神奈川県葉山生まれ。リヨン音楽院、サン・モール国立音楽院を経て、パリ国立高等音楽院及び同大学院を最優秀で修了。更にイタリア政府奨学金を得て、サンタ・チェチーリア音楽院大学院で研鑽を積み、ピアノ科及び室内楽科を最優秀で修了。その間、イタリアのヴィッラ・フランカ国際コンクール第1位、フランスのアディリア・アリエヴァ国際コンクール特別技能賞受賞など、数々の国際コンクールで優勝、上位入賞を果たす。これまでに、安川加壽子、カトリーヌ・コラール、ジャン＝マリー・コッテ、セルジオ・ペルティカローリ、藤井一興の各氏らに師事。

フランスを中心にソロ、室内楽など演奏活動を活発に行なっているが、日本では葉山福祉文化会館、逗子文化プラザホール、東京文化会館小ホール等で演奏している。

現在、パリのNeuilly-sur-Seine音楽院で後進の指導にも当たっている。

ダヴィッド・カンピニョン・ピアノ・リサイタル：7月3日(土) 14:00 東京文化会館小ホール